

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 28 年 5 月 24 日現在

機関番号：12601

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2012～2015

課題番号：24653163

研究課題名(和文) 社会心理学とフォークサイコロジーのあるべき生産的な関係に関する理論的・実証的検討

研究課題名(英文) Social psychology and folk psychology

## 研究代表者

唐沢 かおり (Karasawa, Kaori)

東京大学・人文社会系研究科・教授

研究者番号：50249348

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,900,000円

研究成果の概要(和文)：私たちは、他者や自分の行動の生起理由について、心のあり方と行動との関係に関する個人的な信念や理論である「フォークサイコロジー」を用いて説明を行う。一方、社会心理学は、人の社会的行動を心の仕組みの点から説明する「科学」であるが、その仮説や概念のリソースとして、フォークサイコロジーを利用してきた。本研究は、このような状況に対して方法論的な観点から批判的検討を行い、社会心理学とフォークサイコロジーとの有益な関係のあり方について考察を深めたとともに、フォークサイコロジーを援用した仮説に基づく実証的研究を行い、その有効性を示した。

研究成果の概要(英文)：Social psychology often uses folk psychology as a resource for making hypotheses and constructing the academic concepts. Folk psychology is a list of naive beliefs which describe the relationship between psychological concepts and social behavior, and lay people often adopt it when explaining own and others' social behavior. This project examined the relationship between folk psychology and social psychology and clarified some methodological problems when folk psychology is misused, as well as its contribution for social psychology to be a platform to discuss the psychological phenomena at physiological, intra-personal, interpersonal, and societal levels. Furthermore the project, through empirical studies of social cognition, demonstrated the usefulness of folk psychology as a resource for the research hypotheses concerning the roles of the concepts came from naive psychology (i.e., cognition, motivations, emotions and intentions).

研究分野：社会心理学

キーワード：通俗的信念

### 1. 研究開始当初の背景

社会心理学は、人の社会的行動の生起過程を心の仕組みの点から説明する学問である。対して、人々もまた、社会生活の中で他者や自分の行動の生起理由について、人の心のあり方と行動との関係に関する個人的な信念や理論である「フォークサイコロジ」を用いて説明を行っている。社会心理学は、この「フォークサイコロジ」の特性について社会的推論研究を中心に検討を重ね、様々な推論バイアスを明らかにしてきたとともに、「科学的・体系的」に行動を説明しているという点で、自らをフォークサイコロジから差異化してきた。しかし、一方では、社会心理学の中にフォークサイコロジが侵入することに関する方法論的問題を指摘する議論も存在する。フォークサイコロジが用いる心的特性に関わる概念（欲求や性格など）や概念関係に関する一般化が、規範的モデルとして使用される際に生起するトートロジーや（Flecher, 1995）、さらには、社会心理学者自身が仮説の構成や研究知見の解釈において、「常識的な行動理解」と整合性を図るといった問題（Baumeister & Bushman, 2008）が指摘されている。したがって、フォークサイコロジへの不適切な依拠や迎合を批判的に検討し、方法論教育や、知見を正しく社会に還元するための科学コミュニケーション、今後の研究展望につなげることが、社会心理学のメタな課題として重要であるという背景が存在している。

### 2. 研究の目的

本研究は、社会心理学とフォークサイコロジ（通俗の心理学）の「あるべき生産的な関係」を築くことを目標に、社会心理学研究の具体的な実践をフィールドとして、社会心理学と科学哲学の協同的作業による方法論的検討を行うことを目的とした。具体的には、フォークサイコロジの社会心理学への侵入の功罪を批判的視点から明らかにし、フォークサイコロジを、その追認やトートロジーに陥る可能性を排除しつつ、有効に研究リソースとして活用するための方法論を考察すること、また、研究の成果を、具体的な研究場面に展開、適用し、研究にフォークサイコロジを健全に活用するための方法論に関する議論に資することである。

### 3. 研究の方法

#### (1) 方法の全体像

本研究は、フォークサイコロジと社会心理学の関係に関する理論的検討と実証的検討を核とし、得た知見を総合することで、両者の生産的なあるべき関係の形成に必要な議論を構築しようとするものである。理論的検討については、社会心理学とフォークサイコロジを差異化する根拠の文献的検討を行ったうえで、フォークな概念を科学に用いる際の問題点と条件の科学哲学的検討を行

った。また、実証的検討については、フォークサイコロジを援用した社会心理学的仮説の妥当性について、実験的検討をおこなった。それぞれの具体的な内容は、次のとおりである。

#### (2) 理論的検討：フォークサイコロジとの差異化論拠の整理

方法論に関する論文、「Mind reading」研究など人々の素朴な心的過程の理解に関する実証的研究、および社会心理学概論の教科書を主たる対象として、フォークサイコロジを特徴付ける議論や、社会心理学を差異化する議論、フォークサイコロジと照らし合わせての、社会心理学の存在を正当化する論拠を収集し、内容を系統的に分類した。

#### (3) 理論的検討：フォークな心的概念を科学に導入する条件

フォークサイコロジにもしばしば用いられる心的構成概念（動機、意図、性格など）を科学に導入する条件について、科学的言説が妥当化されるための条件や、心の哲学における議論を適用しつつ、検討を行った。その際、社会心理学や関連領域（教育・性格心理学など）における、「問題のある概念構成」を行っていると思われる研究実例を発掘、参照しながら、心の実在性に関する諸議論の再検討も含めることで、フォークな概念に対する機能主義的批判と科学的概念の実在性に関する議論を展開し、科学哲学理論としての精緻化も目指した。

#### (3) 実証的検討：フォークサイコロジを援用した社会心理学的仮説の妥当性検討

社会心理学の仮説生成と実証におけるフォークサイコロジの有用性と妥当性、限界を明らかにするために、他者の行動説明など、個々人が保持する心的過程に関するフォークな理論が適用されうる領域を対象に、その理論が実際の行動の説明として機能する程度を検証するための実験を行った。主に対象としたのは、他者の責任判断、感情理解、行動の原因推論、意志の推論である。これらが生起する理由、また他の判断や行動に与える影響について、フォークサイコロジに依拠した仮説を生成し、その妥当性を、シナリオ実験や、実験室実験などで検討した。なおこれらの成果は多様な分野にまたがっており、具体的に得られた成果については、「主な発表論文等」として報告している論文・学会発表に示されている。

### 4. 研究成果

#### (1) フォークサイコロジの問題点の同定について

社会心理学は、人の心的過程を表現する語彙や概念を多く持ち、それらの概念を、定義を明確にし、測定における信頼性や妥当性をもたせたいうえで使用している一方、その知見

は、「常識的な人の性質に関する前提」にのっとっている。本研究では、少なくとも次の三つをフォークサイコロジーの「問題点」として同定した。それらは、常識が心のモデルとして提案されるものに対して制約を加える可能性、および、確率に基づく実証的知見と提出する言説とのギャップである。以下にそれぞれについての議論を提示する。

#### 常識による心のモデルへの制約

フォークサイコロジーが、常識的な理解の一つであるという性質を強く持つ以上、これを適用した心のモデルの構造は、それを洗練させたものにとどまる可能性を持つ。またこのことが研究のスコープに影響を与える。たとえば、「集団心」がそのようなケースだろう。個人には心があるが、集団には心がないという、オルポートの主張は、社会心理学における集団研究に対する制約として機能したが、これは、心は個人に属するものであるという常識に支えられていたがゆえに、学術場面でもそのまま受け入れられ作用したと考えられる。つまり、通常の個人の心とは「別の概念」として、しかし集団の心として機能しうるあらたな概念を提案する方向に研究が進むことの障害になったと考えられる。グループ・ダイナミクス研究で、認知、感情、動機などが取り上げられているとき、それは集団に属する個人の心のなかに存在するもの、個人の主観的経験としての、認知、感情、動機である。「常識的・直感的な心の理解」に合致した個人の心の追及からの逸脱は、集団研究においても行われなかったのである。

#### 確率に基づく実証的知見と提出する言葉による表現のギャップ

社会心理学は、たとえば、「人はポジティブ感情状態のほうが、ネガティブな感情状態のときよりも、直感的に判断する」など、人の性質や、特定の場面での行動特性について、また、特定のカテゴリーに属する人の心的特性についての「知見」を主張する。しかし、このような言葉による表現は、「すべての人が、いかなる時も」ということを含意しやすく、それ故に、知見に対する誤解を生む。

データが提供するものは、確率的な世界であり、また、「他の条件が一定の場合に」という但し書きがついた条件下での結果である。上記の例であれば、ポジティブな感情状態とネガティブな感情状態を比較すると、前者のほうが、直感的に判断されやすくなるとしても、それがすべての人に起こるわけでもなく、また人によっては真逆の結果を示す場合もあるだろう。一定の数の実験参加者から得たデータの平均値を統計的検定にかけた結果としての知見であり、確率的にそう言えるということなのである。

しかし、日常の社会的な現象の理解に、このような現象の分布に基づく確率的な世界を反映させることは、かなり難しく(Nisbett & Ross, 1980)、確率的な理解ではなく「みんなそうする」という明快な決定論的理解へ

と傾きがちである。このような傾向は、そもそもフォークサイコロジー自体が、確率論的な記述形式を持っているのではなく、「**人は××である**」というような単純化された断定的な記述の集約であるという性質を持つことを踏まえると、研究知見の一人歩きや、誤った理解を世間に流布させることにもつながる可能性があるその危険が高いといえよう。

#### (2) フォークサイコロジーと社会心理学の生産的な関係について

以上の問題を踏まえ、社会心理学はどのようにフォークサイコロジーとの関係を保てば良いのかを考える必要がある。そのさい、科学としての社会心理学という立場から、フォークサイコロジーの妥当性を否定し、その利用を排除するような防衛的な対応は戦略的に賢くない。それは、フォークサイコロジーを排した形で仮説を生成することが、そもそも、ほぼ不可能に近いという事情による。

少なくとも「感情、認知、動機、意図」などの主観的な経験を含む心的過程を提案するとき、それは、社会の中で人の「気持ち」の動きに関して研究者が持つ洞察に基づいている。もちろん、消去主義のように主観としての心を否定し、脳内活動など生理的・物理的に記述できることで社会心理学を再構築するのであれば、フォークサイコロジーを排除することは可能かもしれない。しかし、それが社会心理学の目指すべき方向であるという指針は現状では見えてはいない。

社会心理学は、個人の内的過程・主観のありようについての科学的知見を提出してきた。さまざまな社会状況の中にある個々人の認知や感情、意図、動機などの内的経験にかかわるメカニズムを明らかにすることを通して人の心を理解してきたのである。そして、社会的な行動を説明するという目的を、一般の人々と共有し、フォークサイコロジーで用いられている概念を採用しつつ、「現実の社会環境」が、いかに「個々人の持つ表象としての社会」に影響するかを明確にすることで、フォークサイコロジーを超えた「心」の働きに関するモデルを築いてきた。その状況を示したのが図1である。

#### 「心の仕組み」PJとしての社心

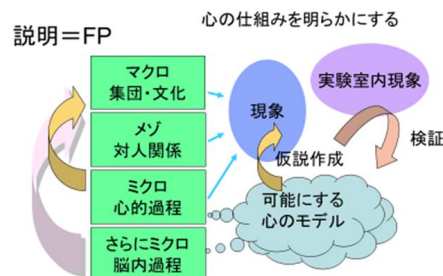


図1. 心の仕組み解明のモデル

またその際、生理的反応や個人の認知、対人関係、集団、文化など、さまざまなレベルの現象をターゲットとし、また、これらさまざまなレベルで定義される変数を独立・従属変数として取り込んできた「重層的」な領域として位置づけられる。つまりは、多様な変数の関係を論じる「プラットフォーム」として機能しているということである。その状況を図示したものが図2である。

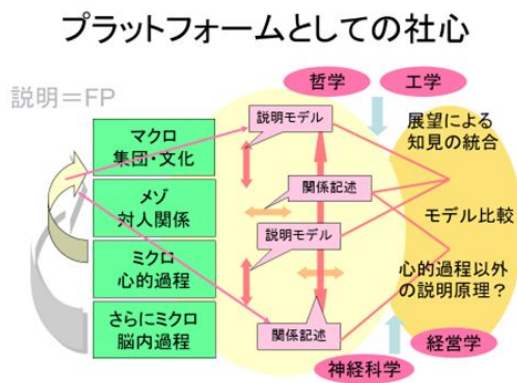


図2. プラットフォームとしての社会心理学

このような枠組みの元、フォークサイコロジーをリソースとして取り込むことは科学知としてのみならず、他領域と連携するポテンシャルをも高めると考えられる。人とは何かを、一般にも理解可能な概念を用いつつ語ることは、その知の社会還元には有利であり、実践知としての役割も支えるものだ。そのような連携と実践の組み合わせは、プラットフォームの上にもどのような変数を導入すればよいのか、それをどう適切に概念化・操作化すべきかを問い直すことにもつながる。これは、社会と個人との関係の問い直しを社会心理学がその内部に抱えることであり、社会心理学が抱える基本的な問いを深化させることにも貢献するであろう。

5. 主な発表論文等  
(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 11 件)  
 Jun, K. & Karasawa, K. (2016) How we view people who feel joy in our misfortune: The influence of expressed schadenfreude in interpersonal situation, Korean Journal of Social and Personality Psychology, 30, 41-61  
<http://www.dbpia.co.kr/Journal/PDFView?id=NODE06614025>  
 Machery, E et al (9名5番目). (In press) Gettier across cultures, Nous, DOI:10.1111/nous.12110

渡辺匠・松本龍児・太田紘史・唐沢かおり (2015) 一般的・個人的自由意志尺度 (Free Will and Determinism Scale; FWDS) 日本語版の作成、パーソナリティ研究、24、228-231、DOI: 10.2132/personality.24.228  
 Watanabe, T., Sakurai, R., & Karasawa, K. (2015) Free will beliefs and moral responsibility: Disbelief in free will leads to less responsibility for third person's crime, Asian Conference on Psychology and the Behavioral Sciences 2015 Official Conference Proceedings, 423-43  
 伊藤健彦・唐沢かおり (2014) 就職活動における集団間の不公平が不公平是正政策への支持的態度や企業への原因推論に与える影響: 獲得的地位に基づく不公平に注目して、産業・組織心理学研究、27、117-127  
<http://id.ndl.go.jp/bib/025598794>  
 白岩祐子・唐沢かおり (2014) 犯罪被害者の裁判関与が司法への信頼に与える効果 手続き的公正の観点から、心理学研究、85、20-28、DOI:10.4992/jjpsy.85.20、査読有  
 白岩祐子・松本龍児・内堀大成・唐沢かおり (2014) 裁判シナリオにおける非対称な認知: 規定因と帰結の検討、人間環境学研究、12、11-16、DOI:/10.4189/shes.12.11、査読有  
 渡辺匠・櫻井良祐・綿村英一郎・唐沢かおり (2014) 自由意志・決定論尺度 (The Free Will and Determinism Plus Scale; FAD+) 日本語版の作成、パーソナリティ研究、23、53-56、DOI:/10.2132/personality.23.53、査読有  
 Sakurai, R., Karasawa, K., & Watanabe, T. (2014) Unconscious goal activation occupies executive functions: Subliminal priming of the graphic stimulus, Proceedings of International Conference on Education, Psychology and Society, 1, 170-177. <http://www.isbass.org/Upload/EditorFiles/201406/20140619183339723.pdf>、査読有  
Todayama, K & Karasawa, K (2014) How radiation and its effect were explained?: Scientific communication after the Fukushima Daiichi nuclear disaster, Int. J. Knowledge and Web Intelligence, 4, 363-347 DOI:10.1504/IJKWI.2013.060276、査読有  
 渡辺匠・岡田真波・坂井真帆・池谷光司・唐沢かおり (2013) 自由意思信念に応じた帰属プロセスの変容、人間環境学研究、11、59-65. DOI:/10.4189/shes.11.59、査読有

〔学会発表〕(計 19 件)

戸田山和久・山口裕幸・唐沢かおり  
(2015)心理尺度と操作的定義を反省する、2015 年度科学基礎論学会、6 月 14 日、北海道教育大学(北海道・札幌市)  
唐沢かおり(2015)フツウの人たちに聞いたことから概念を構築することについて、応用哲学会第 7 回年次大会、4 月 25 日、東北大学(宮城県・仙台市)  
谷辺哲史・橋本剛明・唐沢かおり(2015)非生物に対する心の知覚と道徳的 態度の関連、日本社会心理学会第 56 回大会、10 月 31 日、東京女子大学(東京都・杉並区)  
唐沢かおり(2014)産業・組織心理学のアイデンティティ、可能性、社会的貢献：社会的認知領域の視点から、産業・組織心理学会 30 周年記念シンポジウム(招待講演)、9 月 13 日、北海学園(北海道・札幌市)  
Watanabe, T., Sakurai, R., & Karasawa, K. (2014) The effects of free will beliefs in Japan: Disbelief in free will impairs overriding impulsive decisions、22nd International Congress of Cross-Cultural Psychology、7 月 16 日、レーム(フランス)  
橋本剛明・唐沢かおり(2014)不公正へのコントロール知覚と公正世界信念が謝罪への反応に与える影響、日本グループ・ダイナミクス学会第 61 回大会、9 月 6 日、東洋大学(東京都・文京区)  
松本龍児・櫻井良祐・渡辺匠・唐沢かおり(2014)自己と他者に関する自由意志信念が攻撃行動に与える影響、日本グループ・ダイナミクス学会第 61 回大会、9 月 6 日、東洋大学(東京都・文京区)  
松本龍児・唐沢かおり(2014)自由意志信念の社会的機能、科学基礎論学会 2014 年度秋の研究例会ワークショップ、11 月 1 日、東京大学(東京都・目黒区)  
二木望・櫻井良祐・渡辺匠・唐沢かおり  
(2014)実体性が両面価値的な集団への態度に及ぼす影響について、日本社会心理学会第 55 回大会、7 月 26 日、北海道大学(北海道・札幌市)  
櫻井良祐・渡辺匠・唐沢かおり(2014)実行意図の形成が制御資源の節約に与える影響、日本心理学会第 78 回大会、9 月 12 日、同志社大学(京都府・京都市)  
Sakurai, R., Watanabe, T., & Karasawa, K. (2014) The effects of perceived versus actual ego depletion on conserving regulatory resources、The 5th Asian Conference on the Social Sciences、6 月 14 日、大阪大学(大阪府・吹田市)  
渡辺匠・櫻井良祐・唐沢かおり(2013)人々の自由意志信念とその社会的機能

の再検証：自由意志とは何であり、何をもたらすのか？道徳心理学コロキウム：第 3 回ワークショップ、10 月 26 日、東京大学駒場キャンパス(東京都・目黒区)

渡辺匠・櫻井良祐・唐沢かおり(2013)自由意志信念から援助行動・攻撃行動への影響過程：自己制御という観点から、日本パーソナリティ心理学会第 22 回大会、10 月 12 日、江戸川大学(千葉県・流山市)

白岩 祐子・唐沢かおり(2013)医療機関による説明のあり方が患者の医療評価に及ぼす効果、日本社会心理学会第 54 回大会、11 月 3 日、沖縄国際大学(沖縄県・宜野湾市)

Sakurai, R., Watanabe, T. & Karasawa, K. (2013) Effects of Unconsciously Activated Competing Goal and Its Attainment on Focal Goal Pursuit、The 5th Asian Congress of Health Psychology、8 月 23 日、大田広域市(韓国)

伊藤健彦・唐沢かおり(2013)就職活動の大学間不公平が企業への原因推論に与える影響、産業・組織心理学会第 29 回大会、9 月 8 日、京都橘大学(京都府・京都市)

戸田山和久・出口康夫・唐沢かおり・山口裕幸(2012)フォークサイコロジと社会心理学 その方法論的問題、日本科学哲学会第 45 回大会、宮崎大学(宮崎県・宮崎市)

Karasawa, K., Todayama, K & Deguch, Y. (2012) Methodological Individualism and Folk Psychology in Social Psychology, First Conference on Contemporary Philosophy in East Asia、9 月 7 日、台北(台湾)

唐沢かおり(2012)フォークサイコロジ-問題とピースミール知問題、日本グループ・ダイナミクス学会第 59 回、9 月 22 日、京都大学(京都府・京都市)

〔図書〕(計 5 件)

唐沢かおり・林徹編(2014)人文知：心と言葉の迷宮、東京大学出版会、240  
唐沢かおり(2014)新社会心理学：心と社会をつなぐ知の統合、北大路書房、218  
八田武志、戸田山和久、唐沢穰(2014)本当は間違っている心理学の話、化学同人、452

戸田山和久(2014)哲学入門、筑摩書房、448

唐沢かおり(分担執筆)(2012)「感情理論の適用事例」中島義明(編)・現代心理学事例辞典、朝倉書店 196-211.

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

取得状況(計 0 件)

6. 研究組織

(1)研究代表者

唐沢 かおり (KARASAWA, Kaori)  
東京大学・大学院人文社会系研究科・教授  
研究者番号：50249348

(2)研究分担者

戸田山 和久 (TODAYAMA, Kazuhisa)  
名古屋大学・大学院情報科学研究科・教授  
研究者番号：90217513